

V 今月の注目情報: 収穫期を迎える旧ソ連諸国の穀物の生産・輸出状況

2021/22年度のロシアの穀物生産は、冬小麦の冬枯れにより、史上最高水準の豊作だった前年度からは大幅に減産となる見込みである。一方、ウクライナは前年の干ばつから一転、天候に恵まれ、増産が見込まれている。また、カザフスタンは乾燥により減産の見通しである。各国とも、昨年以降、輸出税や輸出上限数量の設定など輸出規制の設定を繰り返している。最近の状況をまとめた。

1 旧ソ連諸国の生産動向

(1) ロシア

7月以降、ロシアでは冬小麦などの冬穀物の収穫が開始され、8月6日時点で穀物等の収穫は46%進展しており、9月にかけて最盛期を迎えるとみられる。米国農務省(USDA)の8月の需給報告において、2021/22年度の生産見通しは、史上最高水準の豊作の2020/21年度の8,540万トンから15%減の7,250万トンとなった。

冬小麦が、2月から3月にかけて、気温上昇による解凍後の気温低下による再凍結に起因する冬枯れによる被害があったとみられる(図4の1, 2参照)。

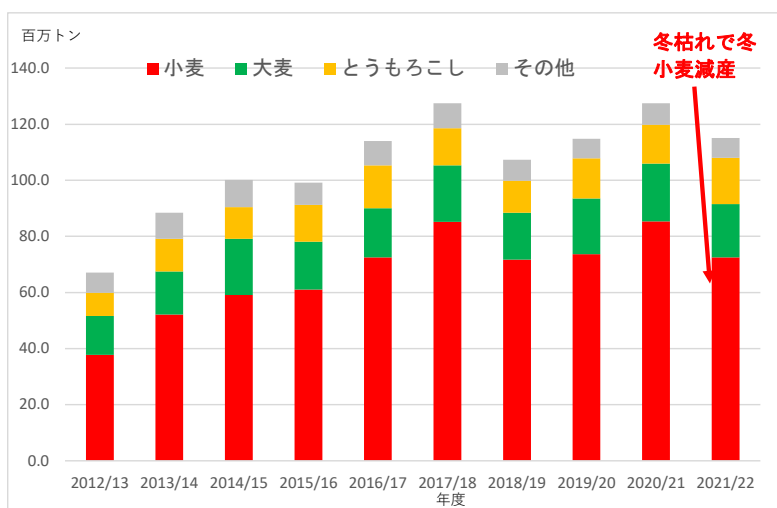
一方、とうもろこしは小麦と比較して生産量は少ないものの前年度より19%増の史上最高の1,650万トンが見込まれている。

また、油糧種子では、ひまわり種の産地で知られ、その生産量は2021/22年度は1,550万トンと見込まれている。最近は大豆の生産も年々増加傾向にあり、もともと中国向け輸出で生産が行われていた極東に加え、国内の畜産需要向けに欧州部でも生産量が増加しており、2021/22年度は史上最高の460万トンが見込まれている。土壌水分量は8月に入り改善されているとみられる。(図4の4)

(2) ウクライナ

2021/22年度の小麦は、生産量の多くを占める冬小麦が春季の降雨に恵まれ順調

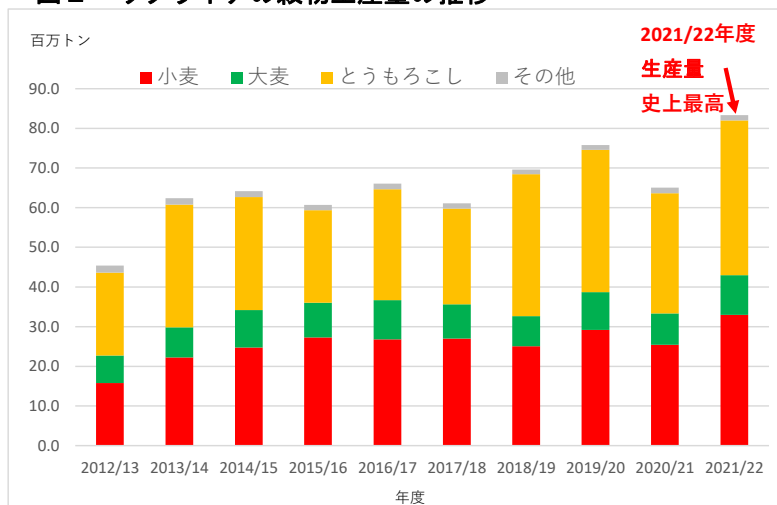
図1 ロシアの穀物生産量の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(2021. 8)

注: その他には、コメ、ソルガム、ミレット、オーツ、ライ麦
ミクストグレインを含む(以下同じ)

図2 ウクライナの穀物生産量の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(2021. 8)

に生育し、8月12日時点で収穫が9割程度進展しており、USDAによれば、前年度比30%増の史上最高の3,300万トンが見込まれている。

一方、とうもろこしについては、干ばつ被害を受けた前年度と異なり、天候に恵まれており、前年度比29%増の史上最高の3,900万トンが見込まれている。

写真 ウクライナの小麦の収穫 (8月2日撮影)
天候に恵まれ作柄は良好



(3) カザフスタン

カザフスタンにおいては、主に穀物生産は春小麦が中心であるが、2021/22年度は、乾燥の影響を受けて作付面積は増加も単収が低下するため、前年度より減産見込みとなっている。

2 旧ソ連諸国の輸出動向

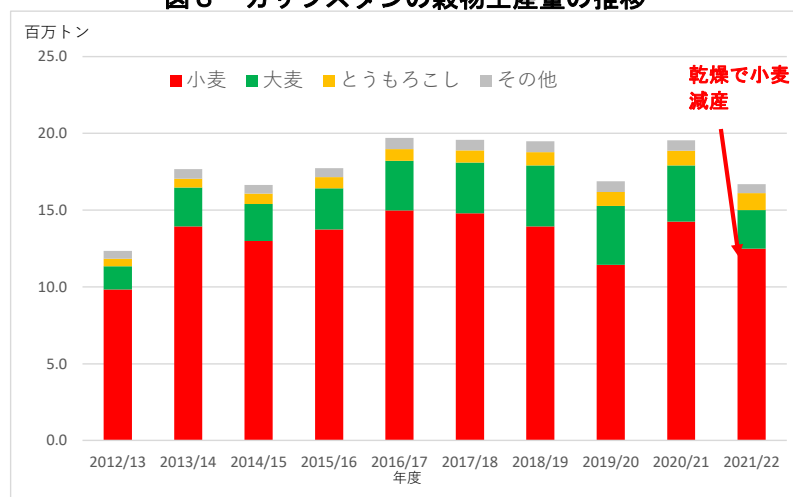
(1) ロシア

ロシアについては2020年の3月以降、国内の穀物価格高騰を回避する目的で輸出割当を公表して以来、断続的に輸出規制をおこなっている。

2020/21年度は小麦が史上最高水準の豊作になったにもかかわらず、国内価格の高騰を防ぐ目的で、2021年2月以降、小麦を含む穀物に輸出枠1,750万トンと枠内税率、枠外税率を設定した。3月15日時点で、枠内税率小麦50ユーロ/トン、大麦10ユーロ/トン、とうもろこし25ユーロ/トン、枠外税率50%（ただし100ユーロ/トン以上）となり、輸出枠は6月末には終了した。他方、輸出関税については、6月2日以降、上記の固定の輸出関税に代えて、毎週の輸出価格に応じて変動する可変輸出関税を小麦、とうもろこし、大麦について導入している。

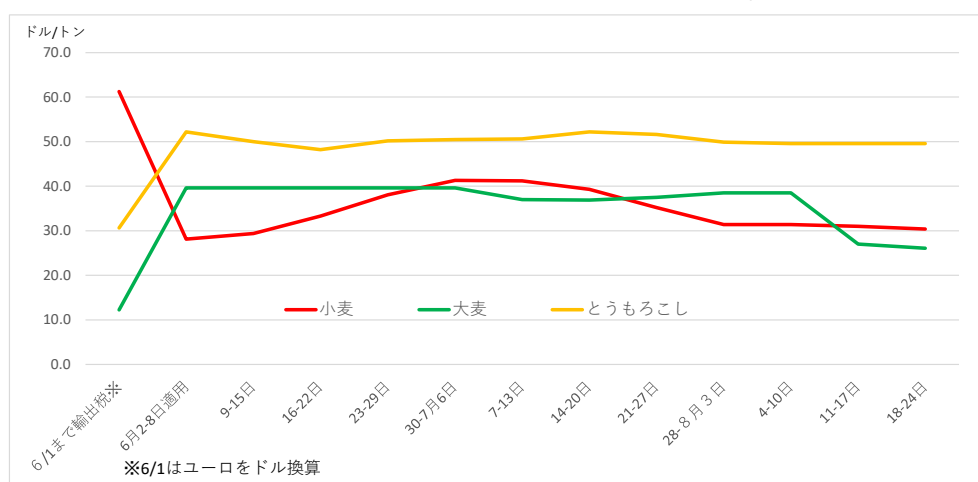
6月2日に導入した小麦の可変輸出関税は28.1ドル/トンと6月1日までの固定の輸出税（ドル換算で61ドル/トン程度）を下回ることから、6月以降小麦の輸出が促進

図3 カザフスタンの穀物生産量の推移



資料：米国農務省「PS&D」（2021. 8）

図4 ロシアの輸出関税の推移



された。輸出枠がなくなった7月以降も30ドル～40ドルの範囲で推移している。一方、6月2日以降の大麦やとうもろこしの可変輸出関税は、6月1日までの固定の輸出税を上回り、大麦は40ドル/トン前後で推移していたが、8月後半に、30ドル/トンを下回った。とうもろこしは50ドル/トン前後で推移している。

このような状況のもと、USDAによれば、2021/22年度の小麦の輸出量は3,500万トン（前年度比9%減）、とうもろこしの輸出量は500万トン（前年度比61%減）と見込まれている。

（2）ウクライナ

2020/21年度（7～6月）の輸出上限数量は、政府と穀物業界団体との合意に基づき、小麦1,750万トン（2020年8月設定）、とうもろこし2,400万トン（2021年1月設定）となっていた。しかし、USDAの本年の8月見通しによれば、減産に伴い、2020/21年度の小麦輸出量は1,680万トン（7～6月）、とうもろこしも2,350万トン（10～9月）と見込まれている。これらの輸出量は、上記の輸出上限数量を下回るとみられる。

2021/22年度は、同様にUSDAによれば、増産見通しに伴い、小麦の輸出量は2,350万トン（前年度比40%増）、とうもろこしの輸出量は3,200万トン（前年度比36%増）と見込まれている。政府と穀物業界団体は2021/22年度に関しても、7月5日時点で輸出上限数量を設定することで合意書を作成しており、8月下旬には小麦に関して具体的な数量が提示された付属書が作成されるとみられる。

（3）カザフスタン

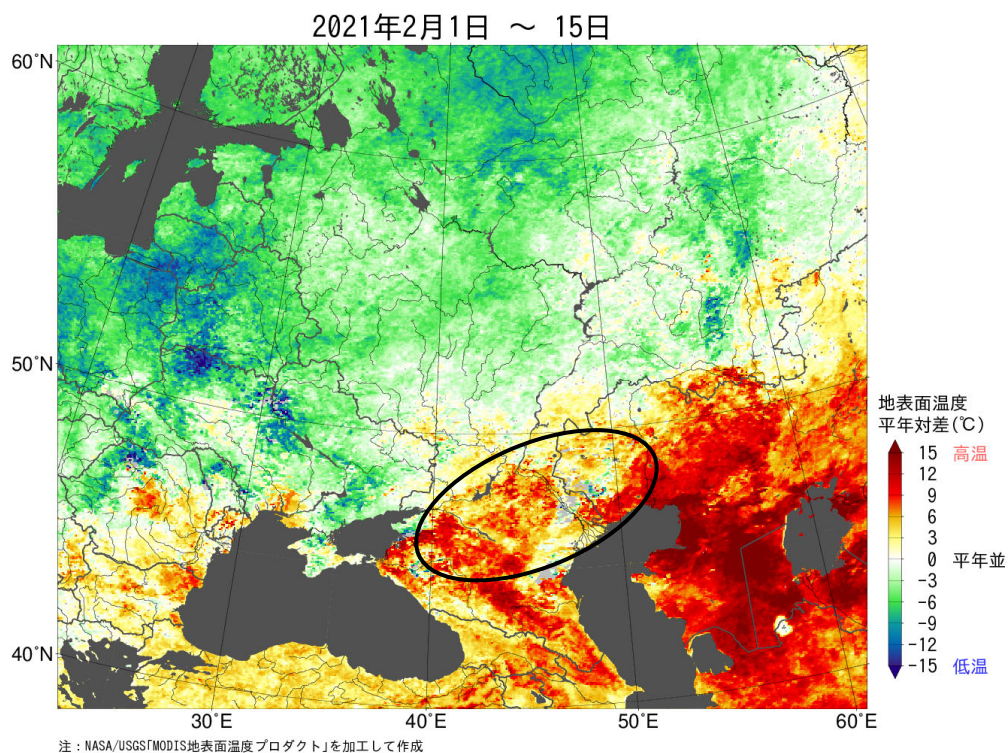
2021/22年度は、乾燥の影響による減産見通しによる国内向けの穀物の確保のため、8月23日以降、6か月間のオーツやライ麦等の輸出禁止が行われ、9月1日以降、6か月間の5等小麦などの輸出枠の設定が行われる見通し。

（4）国際貿易への影響

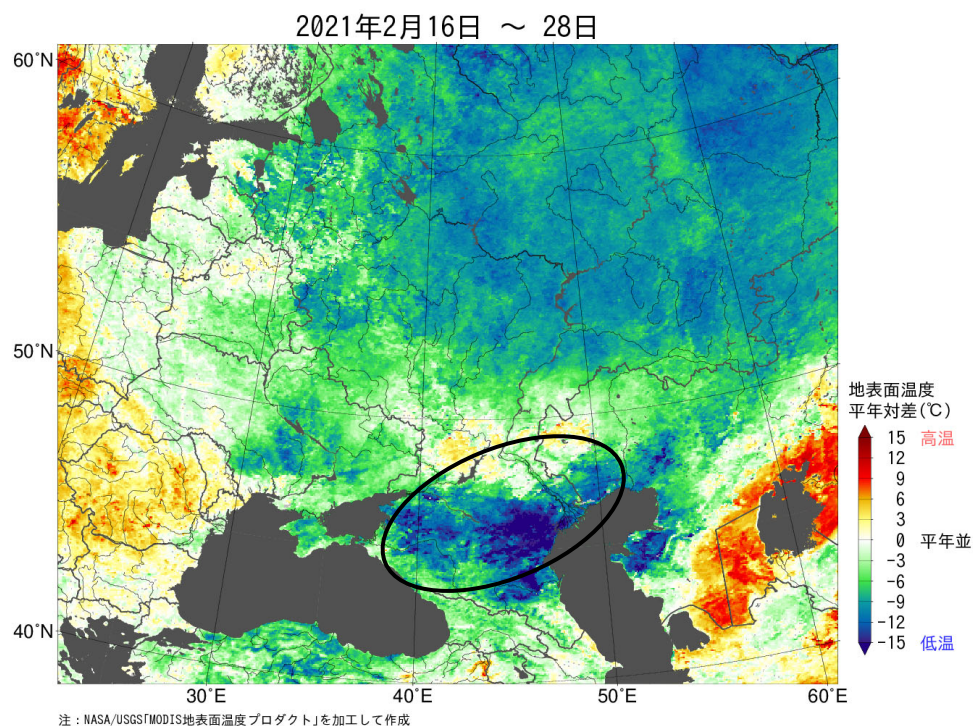
旧ソ連諸国の穀物輸出は、ウクライナのとうもろこしを除いて、世界的に生産国や輸出国の多い小麦が中心であることから、今までロシアの輸出税等の輸出規制が国際需給へ与える影響は限定的であった。ただし、2020/21年度のウクライナのとうもろこしの減産による輸出減は、中国の米国産とうもろこし輸入の増加につながった。

2021/22年度についても、ロシアは小麦、とうもろこし等に輸出税を継続し、ウクライナも小麦に輸出上限数量を設定予定、カザフスタンも小麦等に輸出枠を導入予定である。特に小麦に関して、ロシアの減産に加え、北米の春小麦が干ばつの影響を受け、USDAの8月需給報告で2021/22年度の世界の生産量や輸出量の見通しが大きく引き下げられた。旧ソ連諸国の穀物の輸出動向については、中国の今後の輸入動向にもよるが、場合によっては国際需給へ大きな影響を与える可能性もあることから、今後も注視していく。

図4 (1) JASMAI ロシア西部、ウクライナの地表面温度平年対差 (2021年2月前半)
 ロシア南部の地表面温度が平年より上昇し、解凍 (黒丸)

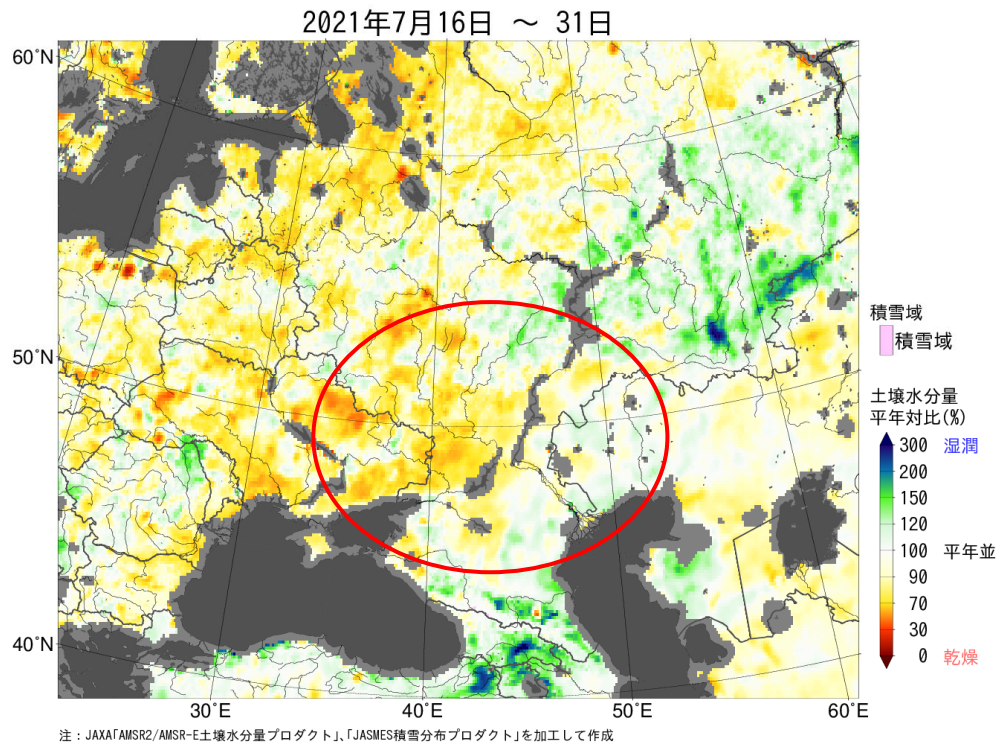


(2) JASMAI ロシア西部、ウクライナの地表面温度平年対差 (2月後半)
 一転、ロシア南部の地表面温度が平年より低下し、再凍結 (黒丸)



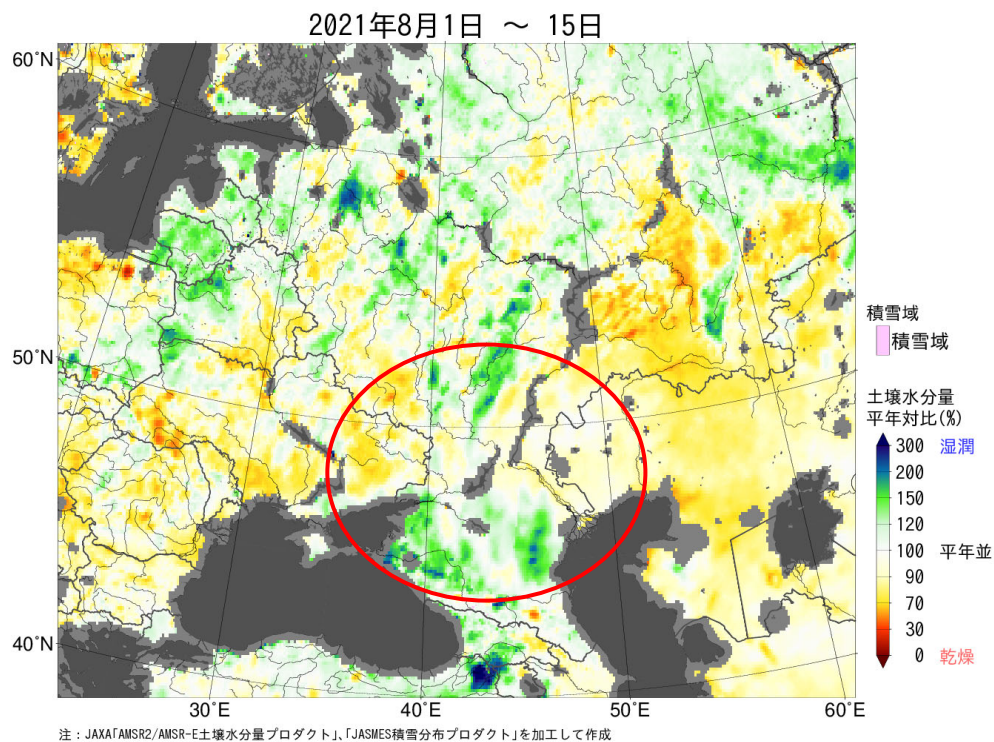
(3) JASMAI ロシア西部、ウクライナの土壌水分平年対比（7月後半）

平年より土壌水分が少ない状況（赤丸）



(4) JASMAI ロシア西部、ウクライナの土壌水分平年対比（8月前半）

多くの地域で平年より土壌水分が少ない状況（赤丸）が継続も、一部で改善



資料：農林水産省「農業気象情報衛星モニタリングシステム」
<https://jasmai.maff.go.jp/>